

学校心理学との出会い

いいだじゅんこ
飯田順子
学校心理学



私は父の仕事の都合で、高校・大学時代をアメリカで過ごしました。自らの意志で海外に行く留学生とは異なり、日本の学校によく適応していた私（今思うと過剰適応？）は、アメリカの学校は始めはむしろ馴染めませんでした。私が通っていた高校は、2000人が通う大規模校でしたが、そのうち100名は日本人という日本人が多い学校でした。親に連れられてきた日本人同士、「日本に帰りたい」「授業に行きたくない」と愚痴を言いながら、友人同士でソーシャルサポートを提供しあい過ごしました。アメリカは中学校になると、日本のような集団の単位「学級」というものがなくなるので、閉鎖された空間のなかでの「いじめ」のようなものは少ないようにイメージされるかもしれませんが、人種や人気などからくる「勢力」みたいなものがあって、ランチを食べる広いカフェテリアの中央の良い席に学校の中心的な生徒が座り、私たち日本人が座っていた席は、大きな窓のすぐ横の席で昼の晴れた日にはあぶられているよ

うな暑さのなかで座っていたことをよく思い出します。「学級」がないため、「担任」の役割は少なく、生徒はスクールカウンセラーに割り振られます。私の通っていた高校には、16名の常勤のスクールカウンセラーがいて、私たち生徒は、学期に1回「何の授業をとるのか」を選択する際に、カウンセラーに相談に行き、カウンセラーがパソコンを操作しながら、生徒を授業に登録してくれるというシステムでした。そのため、スクールカウンセラーが非常に身近な存在で、嫌でも何でも学期に一度は履修相談を受けることになっていました。そんなスクールカウンセラーとの関わりのなかで、印象に残っているエピソードが2つあります。

1つは、ある教科の先生と折り合いがうまくいかなかったときのことです。その授業は「陶芸」の授業で、当時英語ができなかった私には、週に1回の癒しの時間でも楽しみにしていた授業でした。それでも、アメリカ人だらけの授業に行くのに足

が重く少しですが遅刻ばかりしていました。最初の先生は遅刻に厳しい先生で、少しでも遅れると『居残り学習チケット』をふんだんにくれる先生でした。『居残り学習チケット』がたまってしまうとどうしてよいかわからなくなり、スクールカウンセラーに相談に行くと、「わかったわ。あなたのクラスを変えてあげる」と言ってくれて、その授業を別の先生でとれるようにしてくれました。てっきり、「1年間我慢なさい」「その授業をとるのをあきらめなさい」と言われるか、あるいは遅刻をしたことについて怒られると思っていた私ですが、「スクールカウンセラーってすごい」「ちょっとした環境調整で、気持ちよく年間過ごすことができるんだ」と感じたエピソードでした。

もう1つは、高校2年生のときのいつもの履修相談の場面でした。アメリカでは日本人は理科と数学がよくできるというイメージを持たれています。実際、私がアメリカに行ったときも、日本で習っていたことの方が進んでいたのも、数学のクラスは、上級クラスに入ることになりました。アメリカの学校は学校で勉強する時間が短い分（昼の2時には学校が終わる）、宿題が多く、数学の宿題をこなすことを大変に感じていました。自分は絶対「文系向き」だと思っていた私は、カウンセラーに、「数学のレベルを落としたい」と相談しました。このと

きに、カウンセラーから、「下げても良いけど、そうすると理系の大学に行けなくなるわよ!」と忠告されました。そしてそこで、自分が将来、何がやりたいのか、どういった大学に行きたいのかということのを少し一緒に考えてくれました。授業を1つ選ぶことが、将来の自分の進路を決めていくと考えると、ずいぶん大きな選択だと感じました。「進学先」「就職先」を選ぶということは大きな選択であり、それができるようになるためには、その前の「1つの授業を選択する」「日々の生活でどのように過ごすかを選択する」という練習が必要だということのをなんとなく感じた出来事でした。

このような経験から、私は「スクールカウンセラー」という仕事にとっても魅力を感じました。その当時は、スクールカウンセラーという仕事が一部の私立学校を除いて、まだ日本には導入されていない時代でした。そんななかで、スクールカウンセラーになりたいという想いをもちながら日本に戻ってきて、出会ったのが『学校心理学』でした。日本の学校で行われている担任の先生、教育相談担当の先生、特別支援教育の先生、養護教諭の先生がされている援助活動に、子どものことを一番よく知っている保護者、心理の専門家であるスクールカウンセラーが加わり、新しい援助サービスのモデルを作っていくという学問に今はとても魅力を感じています。